

令和五年三月二日(木)

兼題『雛』、席題『入』

桃の節句の前日に句会を、日本俱樂部にて開催。

首藤 しずを

早春の風を捉へて鳶高し

クレソンや速き流れのたゆたへる

手づくりの夫婦雛もて嫁ぎけり

ぶらんこの子らの消えゆく大入日

春寒や薄着こたふる駅ホーム

高橋 由紀子

小さき手で雛のあられをお裾分け

梅の香や八十路の手習ひ入門書

雛寿司をひとり作りてひとり食む

老犬の綱引く強さ春の雪

春昼やよちよち歩きと笑顔の輪

長尾 進一郎

雪解けや流れ滔滔多摩の堰

押入れの雛の目覚める日和かな

気に入りの散歩コースや風光る

川の面に無数の春の光りたり

釣人の影のゆらゆら水温む

宮原 凧

向き合ひて手話の指先風光る

ティーカップの金継ぎ光る春の朝

手折りたる梅の一枝を仏前に

シヨウウインドウ老舗菓子屋の雛飾り

清張の佳境に入りて遅日かな

中村 晃也

吊るし雛猫通る度ゆらめいて

川土手をくの字に下りて名草の芽

三世代女ばかりの雛祭

香りたち水仙凜と背を伸ばし

腰入れて大根を抜く紺野良着

松田 一文字

身を振り花の蜜吸ふ目白かな

仏桑華の家々巡り水牛車

淡雪や音もなく散る花に似て

母を追ふ紙の雛を握りしめ

入日燃ゆ梅の白きを淡く染め

森田 元斐

雛壇の匠きらめく佐賀錦

遥かなる沖津の宮へ春霞

大宰府の春やこもごも願ひ札

木洩れ日のかたじけなきや春の杜

春の鴨うすき入り日は山の端へ

新田 ゆふき

湧水の入るる小川を春行けり

駐車場に餌食ふ猫や春寒し

浅春の名水汲まむ竹林

紙折りの雛の裳裾日の陰り

咳ひとつ樹下にこぼして春の月

志村 良知

お茶受けの豆に代わりて雛あられ

春の月入り残る空雪の明日

寄せ植えのそれぞれに伸び春來たる

老ひし梅異国の人の慈愛の目

梅園や三年振りの茶屋の旗

大津 そうかい

せせらぎと共に下りぬ春の山

札掛の真摯な願ひ梅香る

春風や停車する度ホームより

雛の間や長寿を祝ふ三世代

待ちわびし大阪の春土俵入り

安藤 晃二

紅梅や入日に透けて香しき

父のこと三月三日の誕生日

懐古館の土蔵に飾る雛の壇

居住まひや野点の席の梅日和

観梅の筵ひっそり国逃れ

内藤 まりこ

梅まつりの入り口はここと土産売り

老木のごつごつの枝白き梅

WBCやくら満開のキャンプかな

春めくやシルバーパスの一人旅

石段に雛(ひいな)を並べ大子町

浜口 須美子

取り壊すホテルの窓に春入日

年ごとに男雛の頬の陰りかな

巣立つ子の機影はすでに雲に入る

笛太鼓無くせしままの囃子雛

灯を消せば男雛女雛が語り合う

西川 知世

尖塔の十字架細し花の冷

手捻りの皿に納まり椿餅

潮入の池の面に泡春浅し

すくと立つ男雛の肩の華やげる

啓蟄や渋谷どの辺地下を出で

次回は令和五年四月六日(木)、

兼題は春の季語「春燈(灯)」「首藤しずをさん出題)、席題は西川知世さん出題の「風」です。